

第35号
2013・6・9発行
金光教学研究 所

今ここに届けられる言葉

第二部部长 高橋昌之



教学研究所では日頃、研究者がそれぞれの課題に向けて研究を進めるとともに、長い目で見て教学全体に必要と判断される作業にも、所として取り組んでいる。

その一環としてここ数年、『金光教典』にある「金光大神御理解集」のもとにもなった、金光大神の言行資料の検討作業が続いている。この作業を通じて、「理解」として編纂されるに至る過程を辿り直すなど、広く資料に接しながら、改めてそれらの言葉への思いを新たにしている。

言行資料には、市村光五郎や山本定次郎らの様に自身（もしくは代筆者）が筆記して本部へ提出したものや、明治四三年に教祖御略伝編纂委員会が直信らから聴取したものをはじめ、収集経緯にいくつかの形態がある。このようにして収集された言葉に触れるとき、そこに含まれる豊かな内容

とともに、それらが今ここに届けられている、という事実にはハッとさせられることも多い。私がそのような経験をさせられた一人に、国枝三五郎がいる。

国枝三五郎といえば浅口郡乙島村（現倉敷市玉島乙島）の人で、眼病で失明したため妻が金光大神広前へ毎日代参して晴眼となり、後には神道金光教会講社第一番教区目明組を組織して布教に努めたとされる（六年間に三度盲目になったとの伝えもある）。「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」のように『金光教典』に掲載されたものの他、新旧教祖伝『金光大神』にある所謂「西瓜の初なり」の話など、本教信奉者の間で長く語り継がれてきた言葉を伝えたことはよく知られている。

この国枝が伝える言葉に関して興味深いことの一つは、彼が生前に教内紙誌上で語ったもの等数例を除き、ほとんどが彼から話を聞かされた近親者をはじめ、第三者を通じて収集されたことである。その一因としては、教祖御略伝編纂委員会の調査がなされる前年（明治四二年）に彼が亡くなり、同委員会で直接話を聞く機会が失われたことが考えられる。そうした事情も勘案したとして見逃せないのは、国枝が金光大神の話を色々な人に語っていたことと、その相手が彼から聴き取った言葉を記憶し、今に伝わったという事実とその意味であろう。

例えば先の「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」は、もと東京本郷春木座の座長だった歌舞伎役者の岡本駒之助が、金光宅吉を介して伝聞したとされる。岡本は金光大神没後、大本社で金光宅吉の言葉を数多く筆記したことで知られ、その折りにこの言葉を伝え聞いたといい、「教祖の神より乙島の国枝氏へ宣玉ふたり」と添え書きされている。失明を契機として道に誘われた国枝が、まさに求めて止まぬ経験を伴ってこの言葉を金光宅吉に語り、更にそれに触れた岡本が自身に深く響いた言葉として筆記したものか、と想像させられる。また「西瓜の初なり」の話は、教祖伝記奉修所の調査（昭和二三年）で近隣の教会長から聴取され、後に他の伝承者による伝えも反映して現在の形になっている。これら二例の他にも、国枝の孫や沢井光雄（和歌山教会初代）ら、数人が国枝から聴いた言葉を伝えている。

こうして見てくると金光大神の言葉が、それを直接聞いた者のみならず、その言葉に触れた人々にとつての経験を介して一つの言葉となり、今に伝わったという事実がより鮮やかに浮かび上がる。研究所での日々の研究では、金光大神の「理解」や「覚書」「覚帳」をはじめ、各方面から収集した様々な資料・文献等に当たりながら、現在の人間状況に向けた意味を読み取り、表現するべく取り組んでいる。そうして大切なのは、研究者自身が今

★ 平成25年度の計画 ★

という時代の空気を吸うなかで、向かうべき資料や課題に突き動かされ、まさに追究せざるを得ないものとしてそれらに出会えるかどうかだと、改めて感じる。『金光教教典』刊行三〇年を迎える今日、尽きぬ興味を掻き立てられている。

(岡山・岡山教会)

今春は、研究生二名と教務実習生一名を迎えて、新しい研究年度を出発させることができました。以下、本年度の主な取り組みを紹介いたします。

【第五二回教学研究会】

七月一三日〜一四日に開催します。

今年、第一日に研究発表、第二日に教祖像やその歴史に関わっての全体会(発題・討議)を予定しています。

【教学に関する交流集会】

今秋、東京センターの協力を頂き、教学に関する交流集会を開催します。

【教学講演会】

本年は、教団独立記念祭時(六月九日)

に、岩崎繁之、藤本拓也両所員が紀要第五二号の研究成果を基にした教学講演会を、布教功労者報徳祭時(二月八日)には、紀要第五三号の研究成果を題材にした教学講演会を開催します。

○

この他にも、教団付置研究所懇話会第一二回年次大会(於宗教情報センター・真如苑)や、諸学会への参加等を通じて、広く教内外の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図ってまいります。

また、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図り、より一層、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培って参りたいと考えております。

【平成二五年度研究題目】

〈第一部 教祖研究〉

「覚帳」に照らし出される貨幣経済

―宮の問題をめぐって―

所員 大林浩治

「覚書」へもたらされる視座の問題

―「覚帳」後筆・貼紙を手がかりに―

所員 岩崎繁之

近世末期大谷村の「村普請」の諸相

―治水・灌漑に関する地方文書を手がかりに―

所員 佐藤道文

「覚帳」明治元年九月二十四日の

お知らせに関する一考察

―「わが身の姿を見よ」への注目から―

所員 白石淳平

〈第二部 教義研究〉

金光大神に見る死生への問い

―七墓の事蹟に注目して―

所員 高橋昌之

小幡彦助の事蹟に浮かぶ意味への探究

―神・金光大神・共同体との

関わり合いに着目して―

所員 藤本拓也

〈第三部 教団史研究〉

昭和四十年代の施策過程に見る

地方教務の(自主)とその課題

―「現代社会に布教する

教会委員会」の取り組みを中心に―

所員 児山真生



提 言

囑 託

山崎達彦

教学研究の一層の発展を念願して



昭和五八(一九八三)

年の教祖百年祭の折に
刊行された『金光教
典』は、いつの間にか

新教典”という呼称も

外れて、早や三〇年の節

目を迎えるに至りました。

教団は、その刊行の翌年度の課題の一つに『金光教典』を頂く」を掲げ、その方途として、さしあたり『金光教典』を頂く教師研修会」を開催しましたが、その際に当局は、「教団として、特に『お知らせ事覚帳』の研究は、着手以来未だ期間が短く、現在は、解説による現代語訳をはじめとする基礎研究に取り組んでいる段階にあり、教典の内容についての明確な見解を出すにはいたっていないのが現状である」と断っていたものでした(『金光教典』を頂く教師研修会記録—金光教本部教庁、昭和五九年、一一八頁)。

実際、「お知らせ事覚帳」の解説の重責を担っていた方々のうちの一人であった教学研究員(当時)の金光和道先生も、その『金光教典』を頂

く教師研修会」の講話の中で、『覚帳』は昭和五一年一月から研究が始まりました。今日までに八年がたっております。しかし、なかなか進んでいるとは言えないと思います。字はだいたい読むことはできたわけですが、まだ読めていないところもあります。……いよいよこれから、その内容を深く読み取っていくという段階に到達したということであろうと思います」とおっしゃっていたほどもです(同上、八五頁)。

それだけに、『金光教典』の刊行は、「お知らせ事覚帳」の収録という点からは、いわば「見切り発車」も同然であったと言えなくもなかったかも知れません。私も、当時における「お知らせ事覚帳」の研究状況を聞き及ぶにつけ、学問一般の精神に鑑み、教学研究所の先生方の心中は察するに余りあるものがありました。

反面、その私が、それにもかかわらず、否、それゆえにこそ却って、恐らく信仰的決断を受けた上での、教団としての「見切り発車」に深い感動を覚えたのも、確かな事実でした。この感動は、当時としては二重であったように思われます。と申しますのも、それは、一つには、私とその「見切り発車」から改めて本教の信仰的な開放性に対する「誇り」のようなものを実感したということ、もう一つには、私とその「見切り発車」にこそ、「本教信心の自己吟味であり、信仰生活の拡充展開を

本務とする」金光教学の一層の発展のための、大きな契機としての意義を見出し得るように、実感したということによる感動であったからです。

それにつけても、典籍編修委員として、また幹事として新規の『金光教典』の刊行に尽力なされた教学研究の先生方が、その刊行の直前に開催された座談会において、「多くの先輩諸氏のご苦勞、信心があつて、はじめて『新教典』がこの世に姿を現わすことが可能になったということだけは、忘れてはならないと思います」と言つて、その「先人の研究成果、資料の蓄積」の歴史的な意義に思いをいたしていましたが(座談 新教典を語る(下)『読信』二三号、昭和五八年、六一頁、六二頁)、このことは、今なお私のところでも残響しています。

加えて、新規の『金光教典』の刊行後の教学研究の展望も当座談会においては言及され、「一つの大きな教祖像が生まれてくるのではないか」という期待と、「それは次の世代への信頼というか、次の世代がきつと見つけ出してくれるだろう」という見通しが表明されましたが(座談 新教典を語る(上)『読信』二二二号、昭和五八年、一四頁)、これまた今なお印象深く感じられます。

こうして、私も、この度の節目に当たり、改めて教学研究の一層の発展を念願させていただいてる次第です。

いま、「問い」への意欲をめぐって

平成24年度研究報告

座談会

《参加者》

児山真生(司会)

高橋昌之

佐藤道文

白石淳平

【児山】今年度の研究報告には、

新たに取り組まれたテーマや資料が多くありました。検討会では、新たな問題関心等に触発されたこともあつてか、全体的に

討論も活発であつたと思います。そこで、この場では、参加者それぞれの取り組みを手がかりに、研究報告の全体的動向を振り返りながら、これからの研究に関わる要点などを浮かばせて行けたらと考えています。そ

こで、新たなテーマに取り組んだ一人として、白石さんに研究報告に取り組んでの感想を聞いてみたいと思います。

【白石】この度の研究報告では、金光大神が神のお知らせとして「生神金光大神」と出会わされた意味を論じようと思いました。そもそも「生神金光大神」に注目させられるのは、数々の先行研究を読みながら、いまだ捉え尽くされていない奥行きと

広がりを感じるからです。このことによって、私は、いま信仰をめぐって抱いている「曖昧さ」「戸惑い」「気後れ」といった感覚を、解消すべき問題としてではなく、新たな「世界」に出会っていく契機として見出せるのではないかと考えるようになりしました。

【児山】「生神金光大神」に関わっては、これまでも数多くの先行研究がありますが、白石さんの問題関心において、先行研究はどのように捉えられているのですか。

【白石】「神」、「存在」、「働き」など、「生神金光大神」をめぐる解釈のあり方に学びながらではあります。いまとして関心を強くしているのは、それら解釈の背景にある研究者の「生神金光大神」との出会い方です。決して一様ではない出会い方に触れて、自分にも出会うことが許されているのだと、テーマへの意欲をかき立てられています。

【児山】新たな研究関心から、先行研究がどのように読み直されていくのか、今後が楽しみです。先行研究との関わりという点では、もう一つ、佐藤さんの取り組みに見られた、金光真整先生はじめ、三矢田守秋先生、金光和道先生たちの「小野家文書」に関する研究成果自体が、一つの「資料」となって立ち現れているというか、そこにも新たな先行研究との対話のあり方が浮かんで来ているように感じます。

【佐藤】私は、慶応二年の「添翰願」の意味を村方との関係で考察しました。従来の研究において「添翰願」は、金光大神の神主号取得(慶応三年)との関わりで言及されていますが、調べてみると慶応二年は大谷村にとって、浅尾騒動はじめ、米の不作など多難な年であり、私は、そのような年に「なぜ村方は添翰願を書いたのか」ということに関心を持つようになりました。それから「永代御用記」を中心に、「小野家文書」の資料群を読むようになりました。

【児山】「小野家文書」の解説の成果は、紀要に発表されていますが、その印象は、金光大神や家族に係る箇所が重点的に、あるいは限定的に掲載されているように思うのですが。

【佐藤】確かに、紀要に発表されているのは、解説されたもの全体からすれば僅かな部分です。このことには、「本教信仰にとって、教学研究にとつて小野家文書とは何か」という問いが関わっていると思つています。私も、「小野家文書」に関心を持つようになってみて、改めて、「なぜ小野家文書なのか」という問いを意識するようになりました。「小野家文書」からは、大谷村の人びとのことや、村の生活に関わる事柄を知ることができます。では、それ自体が本教の信仰や教学にとつてどのような意味があるのかと問われれば、考える手がかりになると言うのが精一杯です。ただ、村の様子

が分からないままでは、金光大神の信仰の意味を考えていくことも難しいと私は思います。ジレンマはありますが、それは私だけではなく、先輩方もおそらく同じジレンマを抱えながら、解説を続けてこられたのだと思いますし、その中での紀要への発表であったのだと思います。これからも、「なぜ小野家文書なのか」という問いを問いなから、同時に金光大神の生活意識を考える手がかりとなることを信じて解説を続けたいと思っております。まだまだ読むとはいっても、先輩たちがされた解説の成果に随分助けてもらいながらですが、私も「なぜ小野家文書なのか」という問いを問いつつながら、やがては紀要にも発表していけたらと思います。

【高橋】 佐藤さんの話を聞きながら、以前、金光和道先生が「一冊（解説）出来た！」という喜びを語っておられた姿を思い出しました。そこには、どのように関係をつけていくかばかりではない、取り組みを通して関係が付いていくあり方というものがあるように思います。

【白石】 いまの、意味を明らかにすることと作業することの関係の話を聞きながら、以前、事蹟の解釈に関わって「事蹟に関わる歴史事実の究明過程があつてこそ、歴史事実と研究者・信仰者の関係を問うことができる」と、教えられたことを思い出します。歴史事実を追究した研究や資料の積み

重ねがあつてこそ、「覚書」「覚帳」の中にある様々な関係というような（動き）も見えるようになってきています。さらには、そうした（動き）との関わりの中で、それまであまり関心を持ち得なかった言葉や事蹟にも、「これはどういうことだろう」と意識を向けさせられるようになってきていくと感じています。またそこには、いまだからこそ問えるという予感めいたものがあります。

【高橋】 現在の私たちは、積み重ねられた多くの歴史事実と、それと共に拡張されてきた課題意識のあり方、研究領域を前にしながら、さらにはまた、資料状況が調ってきたことによつて「ここまでは言える／言えない」という側面もハッキリしながら、研究を構想しています。一方で、研究所草創期は、まずもつて事実の究明から、さらには資料収集から始める環境にありましたから、その意味では、研究環境としては随分違います。

【兎山】 資料状況について言えば、教団史研究の場合もそうですが、各研究分野とも、例えば、三〇年前と比較すれば随分違つてきています。それゆえにまた、「覚帳」を読むことができる私たちは、「覚書」によつて考えられていたことの凄さを改めて知る状況にあるとも言えます。

【高橋】 そのような数々の先行研究の思いと出会いつつ、またさらに現在の諸学の研究動向や成果と触れることで、研究の問いが新たにされていると

思います。例えば、私の研究で言えば、「七墓」という家族や飼ひ牛の死について、かつてそれは、金光大神はどのように乗り越えたのか、として問われました。いまからすれば、「覚帳」の有無など、研究環境の違いはありますが、いま読んで、その問いを問うた「問いたい」「明らかにしたい」という研究への思いがひしひしと伝わってきます。このことによつて研究意欲をかき立てられながら、さらに現在の「死が神を介して現れてくるのは何か」という諸学の問題意識に触れることで、かつての「乗り越え」の議論の手前にある、金光大神における家族の死との出会わされ方というもの、研究の関心として拓かれてきたように思います。関心はそうとしても、それに基づく研究の妥当性をどのように示していくことができるのか。いよいよこれからの課題になってくると思います。

【兎山】 いまの私たちは、資料をはじめ、積み重ねられた研究成果によつても背中を押されながら新たな研究に向かっています。だからこそ、かつての人たちが「私たちの時代にその資料や研究成果があつたなら、私もそれをやりたかった」と言われるようなものを、いまならではの問う（営み）によつて現して行ければと思います。ありがとうございます。



～ 特集 いろいろな記念年 ～

今年、「教祖130年」。そして、金光四神君120年、金光攝胤君50年のお年柄でもあります。さらには、各種団体の創立や典籍等の出版物発行においても節年を迎えることになっているようで、それが偶然なのか、必然のことなのか、いずれにせよ時節を頂いての本年だと思わされます。

ここでは、四名の方々に、それぞれ身近に感じられる記念年の事柄について、思うところを寄せていただきました。

いっそうの喜びを

研究員 高阪有人



頃のことであった。たいへん興味深い話だったはずなのに、私はどうしてもこの話の結末が思いつけない。

今思えば、その時から「今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ」というみ教えがなにかに付けて気になることになったようである。こんな言い方をしては大変ご無礼だが、感覚としては、このみ教えが私にまとわりついているような感じなのである。それは、教会で御用をいただくようになってからもそうであり、今では、とても親しみを感じるまでになっている。

と、このみ教えをこういう付き合いから頂いてきているのだが、最近、ふと思いついたことがある。それは、教典を開きながらのことだった。理解伝承者の方々に、み教えを教祖様からいただいた時のことを「天地が開ける音を聞いた感じではないですか？」と尋ねたら、「確かに、そういうふ

うに言えるな」と答えてもらえるのではないかと。何の根拠もない思いつきであるが、教典のみ教えのひとつひとつには、それぞれの天地の開ける音が響いているように感じられるのである。

一方で、自身を省みれば、問題に直面したとき、また、普段においても、教祖様が何を言っていたのかということを追いかけることに精いっぱいになり、み教えの一面だけしか見ていないことを思わされる。そんな自分に気づかされつつも、教祖をして天地の開ける音を聞くことと表現せしめるような体験のあり様、また、そこにあつた言葉であるみ教えが湛える豊かさへと思いが至らされ、心が励まされる思いがするのである。

教祖一三〇年のお年柄にあたり思うこと。それは、現行教典刊行三〇年のお年柄でもある今日、教典がいつでも手に取れ、そこには、天地の開ける音が響いている言葉があふれている。このことを、喜ばせていただきたいということである。そして、お年柄をいただき、ますます信心を求めさせていたただかなければならないのであるが、まずは、このような教えに基づく信心がこれまで伝えられ、今、私の手元にあるということを大いに喜ばせていただきたいと思うのである。

(滋賀・大津教会)

「教祖百年」から三〇年

第一部所員 岩崎繁之



(いやそれはなかった)など

と話をしている、ふと、ある光景を思い出した。それは、私が小学一年生の頃の教会での御祈念の様子。唱え言葉がある日突然変わって、父(現教会長)や信者さん方が文言やリズムに戸惑いつつ、少しでも早く自分のものにするかのように何度も繰り返し唱えていた様子だ。ほとんどふぞろいなその声が、たまに不思議に調和しだすと、私に心地よさを抱かせたのだった。

とりわけ鮮明なのは、朝六時の御祈念後のこと。祖父はお結界に座る一方で、父と数名の信者さんは広前に机を出してその周りを囲み、それぞれに茶色い分厚い本を持ち、書かれた言葉を声に出して輪読し、一つ一つにああだこうだと言葉を交わしていた。時に声を大きくし、時に全員が「うーん」と黙り考え込んでいて、小学生にとってはやながら国語の授業の様。子供ながらに、「何か大変

な宿題が出たんだ」と思った気がする。記憶が鮮明なのは、大人達のその姿が小学生であった私になにか強烈なインパクトを与えたからに違いない。それが私にとっての「教祖一〇〇年」であった。

あれから三〇年たったことになる。現在の私とはいうと、写真版の「覚帳」と「覚書」を前に「うーん」と唸る日々。ただし、一〇年前の入所時とはやや違って、なんとも読みづらかった筆の文字が、今ではすつと読めて、読む度に新鮮な視界を与えてくれている。例えば、「覚帳」には、振り仮名や「てにをは」のような助詞と思しき書き込みが散見する。そんな箇所では、音読して詰まったために金光大神は仮名を書き込んだのだろうかとか、最初は文語調に書こうとして後で口語調の文章に整えたのだろうかとか。逆に、文末に「候」と書き込み、全体として文語調にしている箇所もあり、ここで金光大神は居住まいをただしたんだろうかとか、あれこれ思わせられている。神からのお知らせという事態を文字でもって書き表し、またそこに書き込みをする様子に、金光大神の人間味が滲み出てきて面白い。そのような人間への出会いの感触が、「覚帳」の活き活きとした言葉の世界へと誘ってくれるかのような現在である。

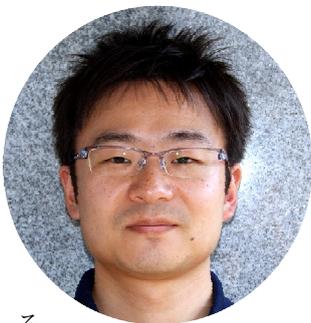
「覚帳」が公開されて三〇年目の一コマは、先人の達の解釈の深まりに導かれるように、また始まりへと押し戻されるかのようにして出会った一コマ

だと思う。一般に三〇年という時間は「世代」を表すそうだが(『広辞苑』第六版)。何かに出会っていく時間は、実はそれくらい必要なことを表しているのかもしれない。今にして思えば、小学一年生の私が受けたインパクトは、大人達が謎へと向かうワクワクするような熱気ではなかったろうか。「教祖一〇〇年」から三〇年経った今、そのワクワクするような謎へめがけて、激しい議論(?)を巻き起こしていきたい。

(大阪・大仁教会)

なにもない自分

主事 中西教幸



非常に情けなく思っている。教祖一三〇年のお年柄を迎え、聖ヶ丘紙上でも、いくつかの記念年が重なっている本年をどう頂いているのかという

テーマを掲げ、自分に対してもそれを述べる場を与えられたというのに、私には思うところがない。もう少し申せば、積極的に求めたい意欲はあるつ

もりののだが、べたべたとしたなにかを自分の中に感じつつも、そそり立つようななにかを掴めな
いでいる。

振り返ってみれば、一〇年前は教祖一二〇年の
お年柄だったのだが、では、その一二〇年目の「教
祖」を自分はどう頂き、どう過ごしたのか。そし
てそれから一〇年の歳月を経て、今自分は一三〇
年目の「教祖」になにを思うのか。なにかしらは
言えるものだと思うのだが、どうやらなにもな
いらしい。しかし、なにもなしで今日を迎えてい
る自分というものが、妙にしっくりきているな
と、ふと思う。

四年前の立教一五〇年の時を思い返すと、この
時も「立教一五〇年を頂く」という言葉を色々な
ところで目にし耳にもした。その中身で、特に強
く関心をもったのが、「私にとっての立教神伝」で
あった。金光大神に立教のその時があったように、
私たちにも信心上の立教神伝と呼べるようなこと
がある。なるほど、じゃあ自分とは思いを巡らす
と、思い当たる節はない。まあ事実、教会御用と
は若干距離のある立場にいるのだからそんなもの
だろうと納得しつつ、なんとなく教会長である母
にそのことを尋ねてみると、聞いたことのなかつ
た母の物語、「母にとっての立教神伝」がそこには
あった。己の立ち位置に対し根付き処のある母と、
それが無い自分。そこには大きな隔たりがあるこ

とに気付かされた。だから自分は空っぽなのだ。
いや、しかしそれは逆にいえば自分は「空っぽの
自分」というものを持っているのではないか。そ
してそれはもしかすると卑下することではないの
かもしれない(自慢することでもないが)。つま
り、お年柄や記念年というのは、節目節目でその
ことに思いをし、改めて頂き直すというきっかけ
でもあるだろう。開き直ってしまえば、こと個人の問
題であるならば、「私にとってのお年柄」が一年間
信心を頂く中で尚、空っぽであったならば、それ
はそれでお年柄を生きたことになるのではないか。
とは言え、「教祖」の信心は一三〇年前も今も生
きており、それを頂いての今年である。であるの
に一〇年前も四年前も今も空っぽだと自覚する私。
それでも振り返ればお年柄の度に気付きを得てい
る自分というものに、「教祖一三〇年」は気付かせ
てくれた。

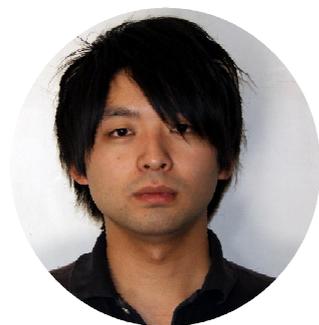
「空っぽの自分」を生きるのではなく、「空っぽ
の自分の自覚」をこそ今年のお年柄を生きる原動
力としたならば、果たして私の中に一三〇年目の
「教祖」はどう現れるのだろうか。

(新潟・真津教会)



節年のエネルギー

第三部助手 山田光徳



幼い頃、得意げに拝
詞集を持って、御祈念
にでていた記憶がある。
取次唱詞と天地書附が
短くて好きだった。

昭和六二年に生まれた
私にとって、現行の儀式、
の儀式、服制、拝詞であり、それらが変わってき
たものだ知る由もなかった。だから、入所して
それが昭和五八年に改定したという事実を知って、
なぜ変わったのか、現行のものはどのようなプロ
セスを経て在るのかという疑問が浮かんできた。
それが、私の研究者への歩み始めになっている。

昭和二四年、教制審議会が発足し、そこでの審
議を引き継いで、昭和二九年に儀式服制等審議会
が発足する。実際に改定の内容を上申するのは昭
和五七年、具体的に実施されるのが翌昭和五八年
のことであるから、三〇年以上の歳月を経ての改
定になる。審議内容もさることながら、費やされ
た歳月が改定の容易なさを物語る。

このように辿ってみると、私の目の前に在った
ものは、その時々
の当局や委員達をはじめとする
多くの人々が携わって為し得たものとして映る。

その過程には、為そうとする意欲と共に、形づくることへの、どれほどの苦勞と、どれほどの不安があっただろうか。そう思えば、在るものが、在って当たり前ではなかったのだと思えるようになってきた。

教祖一三〇年の節年と共に、儀式、服制、拝詞の改定から三〇年の節年を迎える。その他にも、現在の教典刊行三〇年、本部総合庁舎竣工三〇年、本部広前会堂竣工四〇年など、節年を契機にして、そこへ目がけて何かを為さんとしてきた人々のエネルギーが窺えよう。明治のころからも、記念巡教、或いは教師講習会が開催されるなどしてきた。

これらのような、為さんと企図したものを具現化させてきた人々のエネルギーに触れてみれば、在ることになったものを、へ与えられたから、へ受け取ったと、言い換えてみたくなる。そこには、為さんと企図したへそちら側への意味に、へこちら側への意味を新たに加えていくというような、在ることになったものを通じて関係が構築されていく期待があるように思う。

在ることになって完結するのではなく、在ることになってから始まっていく。そこから生まれてくる意味合いに目を向け、新たなエネルギーとして紡いでいけるようになればと、この度の節年の重なりから、思う。

(岡山・新冒教会)

研究所の思い出

隔世の思い

元所員 品川 千秋



今の時代、ほとんどの人が携帯電話を持っていると思う。携帯電話一つで色々なことが出来る。通話やメールはもちろん、

写真も撮れるし、辞書にもなる。記憶媒体の容量も大きくなり、多くのデータを保存出来るようになった。

私が御用していた当時は、やっとコンピュータの漢字入力が出来たようになった頃で、資料管理に活用出来ないかと模索を始めたころであった。図書も含めた研究所所蔵の全資料を資料室で管理する体制も整えられつつあり、増えてゆくであろう資料の保管方法を検討する中で、当時最先端の様々な機器を見て回った。ワープロを初めて見たのもその頃だった。事務机ほどの大きさで、価格は一千万円以上だったと思う。その後コンパクトで低価格のものが出て、あつという間に普及し、研究報告もワープロ

口で書かれるようになった。

それに先駆け、資料管理のためにコンピュータが導入された。とはいえ、当時は「単漢字入力」のため、入力作業には時間がかかったものである。当時、資料室担当部長だった佐藤光俊先生の、資料室による全資料の一元管理構想に基づき導入でもあった。そのために検討を重ね、時には夜遅くまで話し合いが持たれたこともあり、研究業務の合間を縫ってのことであり、今考えても大変なことであつただろうと思う。

資料管理に関しては、コンピュータの導入を機に進んでいったが、保管についてはなかなか有効な方法がなく、手間も経費もかかるものばかりだった。今は小さなメモリーカードに膨大なデータを保存出来るようになり、検索も容易に出来るようになった。しかも、安価で購入出来るのである。全資料を画像保存すれば、資料を取りに行かなくても画面ですぐ見られるんだと、ふと思ったりもする。

遅まきながら、コンピュータを使い始めて隔世の思いを強くしている今日この頃ではある。振り返れば、先端技術の話聞き、様々な機器に触れ、明るい未来を語り合えた良い時代でもあつたのだと思う。

(愛媛・伊予教会)

研究所の思い出

研究所での大発見

元主事 谷口信一



高校一年の夏、霊地で開かれる青少年育成活動の一つであるフオーゲルのソアリングキャンプに参加しました。その中で『金光大神覚』（以下『覚』）を写すというプログラムがあり、そこで初めて、教祖様という方がおられたということを知りました。四日間の日程では『覚』を写し終えることができず、悔しかったので、『家で写してきます』と教祖奥城で教祖様に約束しました。それが教祖様との出逢いでした。

高校三年のときに、前述のキャンプを三回受講した記念に教学叢書2『金光教祖の生涯』を頂いたことがきっかけで教学研究所を知りました。『金光教祖の生涯』は、なかなか読み進められなかったのですが、巻末の金光大神研究論文一覧を見て驚きました。一人の人の生涯を、これだけたくさんの方が何十年もかけて研究しているのに、まだまだ研究が進められていることを知って、どう生きるよとここまでの生涯になるのかと、教祖様の魅

力の不思議さに惹かれていきました。

それから一七年後、私は学院を卒業し、研究所の事務のご用を頂いたのですが、研究所の先生や会合に出席されるOBの先生と接する度に、「論文一覧に載っていた人がいる」とミミハー的に喜んでいました。そんな感じでしたから、研究所で繰り広げられる強烈な言葉のシャワーを浴びて、それをどう理解すればよいのか分からず、ただしいでいくのに必死でした。それでもその滴は入り込み、私の信心を揺さぶりました。

そうした中、教学研究開設五〇周年の会合で、佐藤光俊所長が『覚』『覚帳』には教祖の生涯だけでなく、天地金乃神の出現の歴史が書かれてある』と話される言葉を聞いて、驚き納得させられました。一人の生涯という有限の枠の中から、無限に広がる天地の神が立ち現れてくる。だからこれだけ研究対象として晒されても、意義を与え続けることができるのかと思いました。大きな発見を頂きました。以来、信心の歩みを進めるにあたって、天地金乃神様にとっての私の意味、私にかけられた願いを問うというテーマが新たに生まれました。御用以外のところでは、野球の試合でヘナチョコボールを投げる私を、研究所チームのピッチャーとして、マウンドに立たせて頂いたことも、楽しい思い出です。

(兵庫・尻池教会)

教祖を想う

以前、ある映画を見て、登場人物が教祖とダブル印象を受けたことがある。それは、中国の山岳地帯に郵便物を届ける配達人の映画だった。車も單車も通らない山道を、郵便物でいっぱいになったリュックを背負って、何日もかけて定められた区域の村々を配って歩く。

テレビも電話もないのであろう、行く先々で楽しみに待たれ、老若男女から歓迎される。旅先での印象深いエピソードに、都会へ出た孫からの手紙を待ちわびる一人暮らしの老婆の話がある。配達人が盲目の老婆に読んで聞かせるのだが、画面には白紙の手紙が映っている。現実には来ない手紙を読んで、孫の消息が楽しみであり生き甲斐ですらある老婆の心を、代わって慰めているのである。

そうした交わりを繰り返す年月も終わりに近づいて、世代交代の時を迎えているのであろう。映画は同行する配達人の息子の目を通して描かれ、語られる。昇進を断り、配達を続けた父について息子は、「父は地位も名誉も求めなかったが、人々の信頼を得た」と語る。この言葉を聞いて、人を思い職に奉仕する姿が、神の頼みを受けて難儀な氏子を取次ぎ助けることに生涯を捧げた教祖と重なるように思った。

以上は映画を見た直後の感想だが、数年経って気づかされたのは、教祖が神の教え・天地の道理を説き聞かす営みは、「便りを届ける」という点でも、また重なるものがあるという点である。もちろん、その便りは誰かを書いたものでなく、見ることも掴むこともできない天地の道理が、心の耳目で感じ観じられ、人の言葉となったものである。教典を手にする時、そのような教典の言葉が心身に染み透り、その一しずくが我が身から染み出ることを庶幾う。

天地人



(平成二四年六月一日、
二五年五月三一日)

人事関係

一、職員(教団職員)

- 書記佐藤幸乃、九月一日付で主事に任命。
- 第二部長兼第一部長大林浩治、一〇月三十一日付で第二部長兼第一部長の指名を解き、翌二一月一日付で第一部長に指名。
- 所員高橋昌之、一〇月三十一日付で幹事を辞任、翌二一月一日付で部長に任命、第二部長に指名。

○所員岩崎繁之、一一月一日付で幹事に任命。

○助手白石淳平、同藤本拓也、一一月一日付で所員に任命。

○助手高司智太郎、三月二十五日付で辞任。

○主事金光未来子、三月二十五日付で辞任。

二、研究生

○教徒松本周、同角真紀子、五月一日付で研究生を委嘱。

三、嘱託

○嘱託金光和道、六月二十二日死亡により退任。

四、研究員

○研究員金光清治、同橋高真宏、一月十九日で委嘱期間満了(共に二期八年)。

○教師高阪有人、同八坂恒徳、一月二〇日付で研究員を委嘱。

※五月三十一日現在

所長一名、部長三名、幹事一名、所員三名、助手一名、事務長一名、主事三名(計一三名)

研究生二名、教務実習生一名
嘱託八名、研究員六名、評議員五名

ニューフェイス

研究生

五月一日、本年度の研究生、松本周さん(埼玉・浦和教会、二五歳)、角真紀子さん(福岡・瀬高教会、二四歳)が研究生を委嘱され、入所しました。九月三〇日までの五ヶ月間、レポートの作成や講座実習に取り組みます。

○松本周さんは、学生時代、バスケットボールや空手道に励んだスポーツマン。特に話題が”武道”に及んだ時、熱い思いを語り出す。

学院の前期課程が終わる頃、「もつと神様の世界を知りたいな」という素朴な気持ちが生まれ、研究所に入らせていただくと思うようになりました。まずは、研究生として知識と技術を養うことに集中したいと思います。

大学の頃は、空手道部主将でした。信心も空手道も同じ”道”。求道の心を土台に、がんばっていききたいと思います。

○角真紀子さんは、初めての平成生まれの研究生。趣味はジグソーパズルなどのパズルを解くこと、苦手なことはファッション全般(特に化粧)と語り、一見、内向的な印象を受ける



研究生入所式後、客殿前庭にて

前列左より
研究生主査岩崎、角、所長、松本、毛利

教務実習生

四月二五日付で教務実習生に採用された毛利義幸さん（香川・丸亀東教会、一二二歳）は、現在、資

のだが、実は、落語研究会に所属し、高座にも出ていた経歴を持つ。ただし、落語好きの竹部所長とは、笑いの趣向は違うとか…。

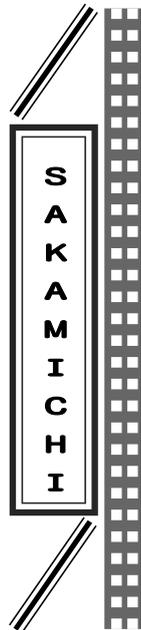
平成元年九月一日生まれで、今年が年女になります。四歳の時に父の御用の関係で金光へ来、以後はずっと金光で育ちました。

教祖時代の風習などに興味があり、是非調べてみたいと思っています。まずは五ヶ月間、しっかりと頑張りたいと思います。

料室で実習を進めています。体を動かすことが好きで、地元のダンスグループに所属し、中学生時代から続けているよさこいダンスの練習には休日

に地元へ帰って参加するほどの熱の入れよう。次のように抱負を語った。

資料室は大体一〇年毎に新しい男の人が入ってきていると聞き、僕が今回資料室に来させていただいたご縁を感じました。先輩の先生方が受け継いできたものを僕もきちんと受け継ぎ、ゆくゆくは、新たに入ってくる人に受け渡せるよう頑張りさせていただきます。



今号も無事発行することができました。執筆を快くご承引頂き、ご寄稿して頂いた皆様に御礼を申し上げます。

さて、今年が教祖一三〇年というお年柄にあたることから、「いろいろな記念年」という特集を組みました。奇しくも提言としてご寄稿頂いた山崎先生も教祖一〇〇年祭に刊行された教典のことに触れられており、それぞれのところで、いろいろな記念年に思いを寄せての教祖一三〇年であると改めて思わせて頂きました。

また、その記念年ということも、大きな節年で

あった教祖一〇〇年祭に向けて取り組まれた事柄が実を結び、そこからの節年であるのだと気付かせて頂きました。

秋の教祖一三〇年生神金光大神大祭に向けて様々な催しが開かれており、本部においても記念シンポジウム（六月二〇、二一日）が開かれます。このシンポジウムには本所からも職員全員が参加の予定です。この機会を通して、研究職、事務職の区別なく、それぞれが「助かり」や「この道を現す」という事を改めて考え、信心のお育てを頂き、ここからの御用の上にもおかげを頂きたいものとお願いしております。

とかくお年柄というと、そこへ向かうことが当面の目標となり、それを迎え終わるとやれやれと落ち着いて力が抜けたようになりがちです。教祖一三〇年というお年柄のこの一年が、秋までのことで終わらず、次の節年へと向けた一年一年に、さらにはそれをなす一日一日が疎かにならないようにと自分を誠めるとともに、一三〇年の歴史があつての「今」であると、その歴史に思いをいたし、御礼を申しながら進ませて頂きたいものと思われたいところでもあります。

⑥

発行・印刷 金光教教学研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二一三一七
FAX (〇八六五) 四二一三一九